

理論とスキーマ理論に基づいて、本実験の結果を考察したところ、スキーマ理論からの説明が妥当であることが明らかとなった。

第6章の総括では、1章から5章までを要約し、最後に、教育実践への示唆とこれからの発展的な課題が述べられた。

筑波大学

教育学博士

長谷川浩一 「心像の鮮明性尺度の作成に関する研究」

本研究では、心理学の歴史において永らく行動主義全盛の風潮下で研究者の関心の外にあった心像 (mental imagery) の心理学的研究、とくに心像現象の操作的研究を試みた。本論文の目的は心像の鮮明性の個人差を測定する有効な尺度を作成することにある。

論文の構成は第I部：文献的研究 (第1章～第2章)、第II部：実験的研究 (第3章～第8章)、第III部：討論および問題点 (第9章～第10章) からなる。

第I部では、心理学における心像研究の現況を、心像研究の流れと心像の定義、心像の研究法、本研究への流れなどを文献により明らかにし (第1章)、課題である心像の鮮明性および測定法についての諸研究を概観し、本研究の課題を設定する (第2章)。

第II部では心像の鮮明性尺度について実験的検討を行う。まず予備的検討を経て、心像の鮮明性を、視覚①、視覚②、視覚③、聴覚、皮膚感覚、運動感覚、味覚、嗅覚、有機感覚の7感覚様相・9カテゴリ、各カテゴリ5項目、計45項目からなり、自己評定形式で回答を求める心像鮮明性尺度 SMI (Scale of Mental Imagery) を得、尺度の特性や有効性を検討した (第3章)。

次に SMI を改訂し、14項目からなる短縮版 SMI-S (SMI-Short form) を得、その短縮尺度の特性および SMI 原尺度に対する妥当性の検討や測定尺度としての妥当性、信頼性について検討を加えた (第4章、第5章)。基準関連妥当性として視覚心像鮮明性質問紙 VVIQ との関連を検討し、信頼性については、60日、1か年間隔での再検査法、折半法による検討と因子的整合性の検討がなされた。

心像鮮明性尺度短縮版 SMI-S と他の主観的心像検査法および客観的検査法との関連性について検討した (第6章、第7章)。とくに SMI-S と客観検査といわれている心像活動を使用する8つの作業検査についての因子的検討の結果、SMI-S、記憶能力諸検査、言語能力諸検査などはそれぞれ独立した心理的特性を測定していることを明らかにした。心像鮮明性は現在の心理学において知能の因子とされている諸能力とは独立する心理的能力あるいは特性であることが考察された。

また、心像鮮明性と他の心理的諸特性との関連について、SMI-S と人格検査による人格諸特性、記憶過程における記憶型、催眠感受性、学生の専攻などとの関連を相関分析や因子分析によって統計的検討を加えた (第8章)。結果として心像鮮明性は、適応的で、神経症的ではなく、外向的な人格傾向と関連し、催眠感受性とも関連するような資質であることが見いだされたが、特定の専攻や特定の記憶の型と特定の感覚様相の心像との関連は見いだされない。

第III部では、まず心像の鮮明性とは何かを第II部で得られた実証的資料に基づいて考察した (第9章)。心像鮮明性は、必ずしも視覚心像の一次元としてだけ存在するのではなく、多感覚様相における心像体験に伴う個人差である。しかし尺度の各項目の鮮明度および各感覚様相の鮮明度の間には得点としての表面的な差異はあるものの、いくつかの因子分析の結果はいずれも第1因子に全ての項目が高く負荷し「心像鮮明性の共通因子」と解釈されることから、心像鮮明性は個人内での感覚様相による差異のある感覚特異的 (modality-specific) な特性ではなく、一般的特性で感覚非特異的 (modality-non-specific) な特性であり、しかも、個人間差異の大きい特性であることが実証された。本研究の結果は「心像論争」における「命題説」に有利な資料を提供した。

今後の展開として (第10章)、心像鮮明性という心理特性の測定にあたり、実験的な手続と自己評定法を用いる新たな尺度として SMI および SMI-S が開発され、教育、心理臨床等の諸領域での応用的実践活動だけではなく、学習、思考、認知、知覚等の基礎的研究に資することが考察された。

筑波大学

教育学博士

佐藤正幸 「聴覚障害児の聴覚的時間知覚に関する実験的研究」

本研究は、聴覚障害児の聴知覚の特徴を聴覚的時間知覚の面より明らかにし、聴覚障害児の聴能訓練及び聴覚補償の手立てを得ることを目的とした。

1) 持続時間の知覚

実験1では、持続時間を変数とした単母音の識別実験を行った。一部の聴覚障害児で母音の持続時間が256～64msで識別率が低下する傾向がみられた。実験2は、同じく日本語 CV 音節 (「だ/da/」と「た/ta/」) の識別実験を行った。聴覚障害児は、子音の持続時間を短縮しないと、無声歯茎閉鎖音「た/ta/」を識別することが困難であることがわかった。実験3では、同じく単語における日本語 CV 音節 (「だんご/daNgo/」と「たんご/taNgo/」) の識別実験を行った。聴覚障害児は、単音節よりも子音の持

続時間を短縮しないと、無声歯茎閉鎖音が挿入された「た
んご/taNgo/」の聴取識別が困難となることがみられた。

2) 休止時間の知覚

実験4では、単語における2音節間の休止時間を変数とした日本語促音(「居た/ita/」,「行った/iQta/」)の識別実験を行った。聴覚障害児は、後続に無声歯茎閉鎖音を有する促音の識別が困難なことが示唆された。実験5では、文章(「父は居間に居た/ita/」,「父は居間に行った/iQta/」)における日本語促音の識別実験を行った。その結果、健聴児、聴覚障害児共に単語呈示における識別時間閾の値との間に差はみられなかった。実験6では、言語音「い」及び「た」を用いた2音間の休止時間における時間弁別閾の実験を行った。その結果、自然音声で健聴児は8~12ms, 聴覚障害児は10~16msであった。一方、帯域濾波音声では健聴児は12~18ms, 聴覚障害児は16~20msであった。実験7では同じく純音を用いて時間弁別閾の実験を行った。1 kHz 純音で健聴児は12~16ms, 聴覚障害児は14~16ms, 2 kHz 純音で健聴児は12~16ms, 聴覚障害児は14~18msという値を得た。

3) 時間順序の知覚

実験8では、持続時間を変数とした自然音声5母音の時間順序の識別実験を行った。時間順序識別時間閾は一部の聴覚障害児で64~89.6msという値を示し、実験1の単母音呈示における値よりも大きい傾向がみられた。実験9では、休止時間を変数とした自然音声5母音の時間順序識別実験を行った。聴覚障害児は1秒あたり3項目の要素交替速度が最適であることが示唆された。実験10では、2母音連続における時間順序の識別実験を行った。母音/i/, /u/の系列において、1番目に呈示された音を正確に識別する割合が75%の時の休止時間を時間順序識別時間閾とすると、健聴児は2ms, 聴覚障害児は12.7~20msであった。実験11では、/i/, /u/のF₁の中心周波数の純音を用いた2音連続時間順序識別実験を行った。その結果、健聴児は14ms, 聴覚障害児は17.9~20msであった。聴覚障害児は、休止時間が12.7ms以上にならないと2音連続の時間順序を正確に聴取識別できないことが推察された。

以上の実験結果を総合的に考察し以下のことが結論とされた。

単母音の識別、自然音声を用いた休止時間の弁別において、最高受聴明瞭度と識別時間閾及び時間弁別閾に密接な関係がみられた。また、2母音連続の時間順序の識別において、平均聴力レベルと時間順序識別時間閾との間に密接な関係がみられた。いずれの実験条件においても健聴児・者に比肩し得る値を示した聴覚障害児がみられたが、これらは平均聴力レベル及び最高受聴明瞭度と

の間に密接な関係はみられず、むしろ聴覚学習による聴覚的情報処理能力によるところが大きいものと思われる。また、聴能を考える場合、それぞれの平均聴力レベル及び最高受聴明瞭度のみならず、聴覚的時間知覚における達成度もあわせて考える必要が示唆された。

筑波大学

教育学博士

原島恒夫 「上位中枢聴覚系における聴覚機能障害に関する聴能学的研究」

本研究では、近年重要な課題となってきた脳卒中後遺症としての上位中枢聴覚系機能障害に関わる問題を取りあげた。本研究の目的は、これら上位中枢聴覚系機能障害の検査法として有望と考えられる聴性中間潜時反応検査及び両耳分離聴検査を、神経心理学的及び言語病理学的に特異な症状を呈した患者に試み、これらの検査結果がどのように対応するのかを調べ、上位中枢聴覚系機能障害という観点から検討することである。

まず第1章では、聴覚系の解剖と生理とを概括し、本研究の目的と方法論について述べた。

第2章では、聴性中間潜時反応及び両耳分離聴検査に関して基礎的な検討を行った。実験1においては、聴性中間潜時反応波形に及ぼすフィルタの影響を調べ、記録条件について再検討を試みた。両耳分離聴検査の基礎的な検討は、まず文献的検討から始め、さらに吉野(1985)の作成になるCV * CV 単音節課題及び吉野が開発した音声切り出し編集装置によって著者が作成した補助検査としてのVCV * VCV 単語課題における正常値を提示した。

第3章の実験的・一臨床的研究では、特異な神経心理学的症状を呈した患者において、著者の上位中枢聴覚系機能検査バッテリーを試みた。

右大脳半球損傷後に左耳の聞こえにくさを訴えるようになった症例において著者の上位中枢聴覚系機能検査バッテリーを試みた結果では、顕著な左右差を示し異常を認めた。

左右両大脳半球損傷後に難聴を訴えるようになった症例において本検査バッテリーを試みた結果では、聴性脳幹反応が正常であったのにもかかわらず聴性中間潜時反応が両側において異常を示し上位中枢聴覚系機能障害を証明するものであった。

左大脳後方領域失語症例において本検査バッテリーを試みた結果では、典型的なWernicke失語症例において聴性中間潜時反応が損傷側において消失したもののWernicke→伝導失語移行型においては、左右に正常な波形が得られた。また両耳分離聴検査結果においては、どちらにおいても左耳優位性が生じたことから、聴性中